自然の教室にようこそ

「二十万坪を、そのままの天然大植物園にしたいのです」（『全人教育』1968年8月号）と創立者の小原國芳が思い描いた夢の先に、いまの玉川学園があります。花が咲き、動物が育ち、鳥がさえずるキャンパスで学ぶ児童・生徒・学生の日常を切り取ります。

生物自然研究部

1967年創部。動植物、昆虫、天体などの自然観察を行う課外活動文化会、生研（なまけん）。コスモス祭では例年、展示発表とタガメサイダーを販売。上は学内での鳥類調査

ただの道が楽しくなる

幼い頃から自然が好き。ですが植物や虫、鳥などにくわしくなったのは大学と生研のおかげです。多様な環境がある丘陵地と里山に位置し、多くの生物がいるキャンパス。知識が増えると、ただの道も楽しくなります。

守屋大地さん
農学部生産農学科3年
生物自然研究部副主務

ともに学び合える環境

実習重視の玉川を志望し、入学後、玉川の森に圧倒されました。部の長所は部員それぞれの興味が異なっても、知識を共有し合い、楽しんで学べること。新たな知見が得られます。自然が好きな方、お待ちしています！

赤星祐美さん
農学部環境農学科3年
生物自然研究部主務

園芸班

班員約70人の、農学部公認有志学生団体。班員100人達成と、収穫祭の作物販売で過去最高売上額が目標という高橋さん。「のびのび野菜をつくりましょう」とは井上広大技術指導員。校門の鉢も園芸班が管理する

恵まれた環境を実感

将来の就農と、指導者をめざしています。芸術学部で学んだ姉の存在もあり玉川へ。農機を扱えてノウハウも学べる園芸班で「つくっていない作物はない」。そう言いきれます。北海道、鹿児島、箱根、カナダのキャンパスで学べた私は幸せ者。恵まれた環境を実感しています。

高橋佳子さん
農学部環境農学科3年
園芸班長

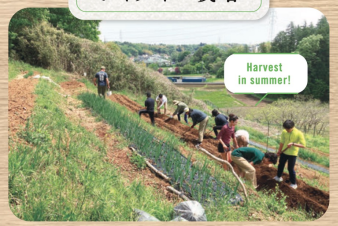
お茶摘み

5月、幼稚部年中組は学内農場を訪れ、農学部教員や園芸班学生の協力を得て、お茶摘みを行った。園児は丘めぐりをはじめ、作物の収穫、毎日の登降園の時間などを通じてキャンパスの自然にふれ、成長していく

タケノコ掘り

3年雪組の丘めぐり。4月の聖山、春の色探しの途中でタケノコを発見。児童の声援を受け、峯尾亜希教諭が収穫した

ジャガイモ栽培



4月の東山、ドゥーガン・ヒンチーとロバート・ホワイト両教諭は、CAS（Community, Action, Service）の活動でIB II年生を率いて、初めてジャガイモの植え付けを行った

丘めぐりの先生に聞きました

不思議と面白さに気がつける「目」を

「アーブルがどんな顕微鏡を使って『昆虫記』を書いたのか、君たちは知っていますか」――昭和36年、農学部での最初の授業を今もよく覚えています。のちに小学部（当時）に推薦してくださる恩師の岡田一次先生が学生たちに問い、こう話されたのです。「それは自分の両の目だよ」と。

大切なのは良い道具を用いるのではなく、自分の目でよく見ることだと教わりました。身の回りの自然をていねいに見る。五感を使って主体的に観察する。丘めぐりの目的とは、自然の不思議と面白さに気がつける目を養うことにあると私は考えています。

各地の学校に呼ばれますが、玉川ほど多種多様な草木や花にめぐまれた学校は本当にまれなのです。だからこそ、大人も自然に学び、子どもたちに気づきを与えられる存在になってほしい。労作とは知識を智慧に変える体験学習です。丘めぐりは場所を問わない労作だと思うんですよ。

佐藤邦昭先生
元玉川学園教諭

1965年農学部卒業後、小学部の理科教諭に。2008年に退職後も全国で自然観察、草花あそびを指導。著書に『作ろう草玩具』など。写真は学園のタラヨウの葉に字を書く佐藤先生。切手を貼れば郵送できる

左は、草玩具のつくり方を紹介した冊子。興味のある方はpr@tamagawa.ac.jpまで（無料進呈いたします・冊数限定）

写真＝岩﨑美里（P16園芸班）　取材・文＝高部清美（本誌）